

戦後池袋の検証 —— ヤミ市から自由文化都市へ

川本三郎／マイク・モラスキー／吉見俊哉／石川巧（司会）

■開会挨拶

渡辺憲司 本日はお集まりいただき、まことにありがとうございます。まず。実行委員長の渡辺でございます。今日のシンポジウムは、豊島区、東京芸術劇場、立教大学が主催となって実行委員会を設置した「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」による戦後七十年企画の一環として開催されています。このプロジェクトは、文化庁の助成をはじめ、他に多くの協賛・後援団体等の協力を得て行っているものでございます。

しかし、何にもましてこのプロジェクトの中核にあったのは、池袋を愛する多くの人びとの思いです。かつて池袋に存在した（ヤミ市）の風景から（自由文化都市）へと大きく変貌していかうとするこの町への愛着であります。主催者を代表して、そのあつのご協力に感謝したいと思います。

私たちが、ヤミ市を思い出そうとしましたのは、その方向に平和への思いがあるからです。開戦、敗戦、そして平和、占領。多

くの人が悔し涙を流したかもしれません。しかしまた一方、多くの国民——ことに庶民においては、空襲のない日々の到来に安堵の気持ちを抱いた人々がいたのも確かです。安堵とは、同時に、明日を生きることです。私たちは、ヤミ市は繰り返しはならぬ歴史であったと強く認識しております。

ヤミ市は、再生への一歩です。ヤミ市に流れた「リンゴの唄」は、安堵、そして平和への感触でした。一九六二（昭和三十七）年まであった池袋のヤミ市は、消えるべきものとして消えました。それは、必然の歴史でした。私たちは懐かしんでいるのではありません。戦後七十年を迎え、風化する戦後、あの大战をしっかりと記憶にとどめておきたいと考えたのです。私たちが、ようやくここまで至った想いの中核にあるのは、いま申しあげたことです。七十年前の今日、すなわち一九四五（昭和二十）年九月一二日の天気予報を新聞で見えますと、この日の天気は「今日は東寄りの風、曇りがち。日中は南風となる。ところどころ晴れたり曇っ

たりの天気」とあります。翌十三日は「雲が高くなり、晴れ間もあろう」という短い予報です。また東條英機自決未遂の記事も、七十年前の九月十二日に載っています。いろいろな記事があるのですが、九月八日、約二万五千人の連合国軍が進駐したという記事も出ております。三十万戸の組み立て式の住宅が十時間でできると書いてあります。そんな記事を眺めておりますと、さまざまに思いがめぐってきます。

今日のシンポジウムが、新たな池袋を考えるための、またヤミ市という歴史を直視し見つめなおすための契機になつてほしいと思っております。

■講師紹介

石川巧 みなさま、本日はご来場いただき、ありがとうございます。司会進行を務めさせていただきます立教大学の石川です。今回、私どもは「戦後池袋」をテーマに、さまざまな企画を立ち上げておりますが、ちょうど一年前、このシンポジウムの準備がはじまりました。日本のヤミ市、あるいはヤミ市から派生した都市の文化に関して、これまでさまざまな蓄積がある中で、本日ご登壇いただくお三方からお話を聞けることは非常に稀有な機会であると思われまます。そうした意味で、私自身も本当に楽しみにしております。まずはお三方のご紹介をいたします。

吉見俊哉さんのご専門は、社会学、メディア論、都市論、文化研究です。日本におけるカルチュラル・スタディーズの中心的役割を担ってこられました。とくにヤミ市に関しては、雑誌『東京人』（二〇一五年九月）の座談会で、このように発言されています。

ヤミ市を考えると、いくつかの層があると感じました。

まず、都市そのものの成り立ちがそもそもヤミ市であること。次に、敗戦を機に、旧日本軍の崩壊により大量の軍事物資が闇で流れていったこと。さらに、占領期には米軍からの物資の非公式の流れがあったこと。そして、ヤミ市がターミナル周辺に形成されることで、戦前までの盛り場文化を質的に変えていったこと。どれも、単純にヤミ市を戦後の自由の象徴と見るのとは異なる視点です。戦災と一九六四年の東京オリンピックを機に、多くの東京の文化や景観が壊されたり、失われたりしていきました。ヤミ市は、オリンピックとともに東京の表面から消えていきました。ポスト二〇二〇年の東京を考えるにあたり、ヤミ市と敗戦、旧日本軍、占領軍、そして高度経済成長の関係を、考え直してみる価値があるのではないのでしょうか。（「自由、解放だけではない 占領下、混沌の中で生まれたエネルギー」）

本日はそうした問題に関する最新の知見をうかがえることを楽しみにしております。

マイク・モラスキーさんは、文学、映画、音楽、さらに近年はジャズ喫茶や居酒屋といった〈都市空間としての飲食店〉などをめぐる日本の戦後文化史を研究されています。先頃、モラスキーさんが編纂された、ヤミ市をめぐる短編小説のアンソロジー『シリーズ紙礫1 闇市』（皓星社、二〇一五年）が発刊され、その解説の中で、次のように述べられています。

終戦直後、東京や大阪のような都市部では、主要な駅や郊外の幾周辺に闇市が散在している。新宿駅周辺だけを見て、も、支配するテキ屋組織ごとに別々の闇市が共存する時代だ。また、闇市とはそのような場を指すだけでなく、戦中戦後の日本社会全体に浸透する経済流通システムを指す言葉である。換言すれば闇市とは市場と市場両方の意味を含有するものとして理解すべきなのだ。

こうしたマイク・モラスキーさんの認識も、ヤミ市を多層的に捉えるという点で、吉見さんと問題意識を共有しているように思われます。

川本三郎さんは一九四四年、東京にお生まれで、一九四五年五月二十五日の空襲で代々木の実家が消失するという体験をされています。朝日新聞出版局で『週刊朝日』や『朝日ジャーナル』などの編集を手がけた後、文芸評論家となり、四十年近く文学、映画、旅などに関する評論、エッセイを幅広く執筆しています。東京をテーマとした都市論、まち歩きなども数多く出版し、戦後日本における都市の変容とその表象を探索し続けていらっしやいます。二〇一〇年から二〇一二年にかけては、立教大学文学部の特任教授として本学の学生指導にもご尽力いただきました。

今回、川本さんにご登壇いただきました大きな理由があります。戦後日本におけるヤミ市の実態を生活文化論の立場から研究し、緻密な史料調査、フィールドワークによってヤミ市を研究対象として浮上させたのは、かつて本学の社会学部教授だった松平

誠氏でした。松平氏が星野朗氏とともにまとめた「池袋『やみ市』の実態―第2次世界大戦後の戦災復興マーケット―」（『応用社会学研究』第二十五号、一九八四年）という報告は現在でもヤミ市研究に欠かせない成果となっています。

今から三十年ほど前の一九八三年、本学社会学部創設二五周年を記念して「新しい盛り場の文化を考える―「池袋」の魅力の発見と創造に向けて―」（記録は『地域開発』一九八四年二月号に収録）というシンポジウムが開催されました。川本氏は、そこでもパネリストとして登場されておりまして、次のような発言をされています。

池袋は「駅前の公衆電話ボックスの中に入るとピンサロとサラ金とホテルのビラが張りめぐらされ、立ち食いそば屋に行くといまだにワンカップ大関のコップ」が出てくるような「ダサイ町」である、と。また、バーゲンとおばさんと古本みたいなイメージがこびりついていて、他の町からバカにされている、そう指摘されました。もちろんその発言の背景には、猥雑さこそが町の魅力であり、人びとが気楽に関わることができるという認識があるわけですが、それから三十年を経た今、池袋は川本さんの目にどのような映っているのでしょうか。本日はそうした観点から、ぜひお話をうかがいたいと思います。

最初にお三方にお話いただき、その後、議論に入ります。それでは吉見さんからお話いたします。

池袋、東京、戦後

——貫戦期の狭間としての闇（ヤミ）市

吉見俊哉 吉見でございます。今日は、川本さん、モラスキーさんという素晴らしいパネリストの方々のお話をうかがえることを楽しみにしてまいりました。また、こんなにたくさんの方々にお越しいただき、とても嬉しく思っております。

今日のテーマは「戦後池袋の検証——ヤミ市から自由文化都市へ」ということですが、池袋やヤミ市についてうまく話せるか、自信が持てません。ヤミ市については、松平誠先生が池袋を中心に、膨大かつ緻密な研究を蓄積されておりますし、最近では初田香成さんがそれを引き継いで良いお仕事をされています。私は、今日のメインテーマの周辺で、「こんな見方もあるのかな」という話をさせていただきます。

「貫戦期の狭間としての闇（ヤミ）市」と題をつけました。「貫戦期」というのは、戦中期と冷戦期を連続的なものとして捉えようという視点です。その二つの時期の「狭間」というわけですから、「戦中」と「冷戦」の狭間という意味です。「戦後」でありながらも「冷戦」とは必ずしも対応しない、つまり高度経済成長の手前の時期の東京に注目してみたいと思います。それで、三題晰のようで芸がありませんが、池袋、東京、戦後、この三つの関係についてどう捉えることができるのか、これから考えてみたいと思います。

東京の中で池袋を考えるのは、なかなか難しいことです。私自身、東京というものを捉えるときに、都心南西部と都心北東部と

の基本的な対立構造があると考えています。都心南西部——六本木や青山、渋谷、原宿は、基本的にアメリカンシティです。つまり幕末に薩長が攻めてきて、東京を占領した。その薩長が占領した地域が、やがて日本軍のさまざまな施設になり、敗戦とともに米軍がそこを接収し、一九六四年の東京オリンピックによって新たな施設が建設され、その後のファッショナブルな東京の中心を担っています。

一方、都心北東部は、浅草、上野、秋葉原、神保町といった一帯です。江戸・幕末から続いてきた、江戸あるいは明治・大正の東京の中心的な秩序がある地域です。薩長というより佐幕派、アメリカンというよりアジアンな都市だと私は考えています。

この軸で捉えたとき、池袋はどこにあるのか。それを決めるのは難しいんですね。一言ではいえない難しさが池袋にはあって、そのことを考えていくために、私が現在、東京をどのように捉えて、何を考えているのか——これは上野が中心の話になってしまいうのですが、それから池袋、さらに戦後という三点について、お話しさせていただきます。

■東京の捉え方

豊島区あるいは池袋、雑司が谷といった地域とは少しずれてしましますが、都心北地域に注目します。上野、本郷、湯島、秋葉原、神保町、谷中、根津、千駄木ですね。これらの地域は台東区、文京区、千代田区という三区の区境となっています。最近、私はこの三区をひとつにまとめたと思うっておりまして、台東区、文京区、千代田区の方々と協議しております。

谷中、根津、千駄木、東京大学のある本郷、上野公園、湯島、秋葉原、神保町の地域全体を円で囲むと、だいたい半径一・五キロメートルに全部収まります。二、三時間で歩ける。東京大学から上野公園に何分でたどり着くか、ご存じの方はいらっしやいませでしょうか。東京大学の池之端門から上野公園までは一分とかかりません。東京大学と上野公園は、実は百メートルと離れておらず、私たちが思っているよりはるかに近いのです。この連結性を取り戻すために、現在さまざまな環境プログラム、文化プログラムを考えていて、これらの地域をまとめたと思っています。池袋も豊島区が中心となつて文化都市構想を進めています。都心北地域も、区境の地域をつないでいくことによって、さまざまなものがよみがえるのではないかと考えているところです。

一九六四年の東京オリンピックを大きな契機として、東京の文化的な中心が、上野や浅草、神田といった都心の北東地域から、港区や渋谷区といった南西地域に移動したと思います。こうした移動は仕方のない変化だったかもしれませんが、その変化によって失われたものがある。都心北東部は、寛永寺、上野、神保町、湯島といった江戸・明治からの東京です。一方で、都心南西部は、港区、渋谷区、六本木、原宿、青山、渋谷という一帯です。この地域には大きなオリンピック施設や公園、テレビ局などがあります。この北東部から南西部への重心移動を、もう一度、少し元に戻すことはできないでしょうか。

最初に申し上げたとおり、都心の南西部が発展した背景には、明治維新があります。薩摩と長州が東京を占領し、都心南西部に軍事施設が建設されていく。日比谷や青山練兵場——現在の明治

神宮外苑です——、これらはずまり日本軍の施設です。それがアメリカ軍の施設になり、やがてオリンピックによって新しい東京がここを中心形成されていった歴史があるわけですが、この歴史と違う東京がありえたのではないのでしょうか。

一つの例として挙げられるのは、一九四〇年代後半に、都市計画家の石川栄耀さんが中心になって、東京に大学や文化施設を中心とした文教地区をつくつていこうという動きがありました。本郷地域についていえば、丹下健三さんや南原繁や石川さんらが、本郷、上野、湯島、小石川をすべてつなぎ、そこを東京のオックスフォードにしようという構想でした。残念ながら、これは実現しませんでした。その後ラブホテルが多つくられる湯島は、国際学術交流地区をめざすはずだったのです。こうした構想は、元々これらの地域が一体性を持っていたことを見抜いており、今日、再評価されるべきだと思います。

森鷗外に『雁』という小説がありますが、その中で、若き日の鷗外自身がモデルになっている主人公が、毎日散歩をします。鷗外が散歩したルートを、明治十六年の陸軍省の地図上にマッピングしたことがあります。東大の医学部のところから出て、不忍池をまわって湯島を通り、秋葉原まで歩いていく。それから駿河台を通って、赤門へ帰ってきます。小説の中で主人公は毎日このあたりを歩いているんですが、これはこの地域がごく当たり前に歩ける範囲だったということを確認させてくれます。

それならば、やがて高度経済成長期に失われてしまったこの一体性をリバイバルできないか。谷中、根津、千駄木の生活、上野の芸術、本郷の学術、湯島の神社、神保町の出版、秋葉原のサブ

カルなど、これほど文化資源が多様に集積している地域はありません。これらをつなげば、もうひとつの違う東京が見えてくるはずだと考えています。

■池袋とは何か

いまのお話は、東京の北側の地域、文京区と台東区、千代田区の区境の帯をつなげたいということでした。その一環として、私は都電を復活させたい。今はだいたい地下鉄で移動してしまいましたが、そうすると、東京の中で自分がどこを通っているのかわかりません。ですが、もう一度ゆっくり走る路面電車を復活させて、いま言った地域を回したらいいのではないかと思えます。それから、首都高速道路を取り払うことができるか、ということです。一九六〇年代に首都高速道路を建設しましたが、外環道をはじめ、外側の道路ができましたから、本当は首都高速道路が不要な場所があるのではないのでしょうか。それならば、首都高速道路を取り払ってしまえば気持ちがいだろうと思えます。

そうすると、区境の問題になってきます。文京区と台東区と千代田区は、それぞれ区の中で巡回バスを走らせていますが、区を越えなくては意味がありません。三つの区をつないで、どういう地域をつくっていくかが重要なのです。

同じように池袋のことを考えるときも、豊島区、新宿区、文京区という三つの区の区境が重要だと思えます。池袋とはなんだろうか。池袋は都心西北部にあたりますが、ここの文化のことを考えてみたいと思います。

一つの例として、都電を復活させたら良いのではないかと話しましたが、戦前から戦後にかけて、路面電車はどこを走っていたのか。戦争直後の東京の都電の路線図を見ると、この頃には池袋まで市電は来ています。しかし、一九二八年の路線図を見ると、戦前は池袋に市電が来ていないことに気づきます。新宿にも渋谷にもおそらく市電は通っていたと思います。しかし、池袋には戦前、一九三九年くらいまでは来ていないのです。

どこが終点かという点、大塚や巣鴨、早稲田、飛鳥山などです。もちろん私営鉄道の中心は下町の帯にあるわけです。一九三三年の市電は、下板橋、大塚駅前、早稲田まで来ていますが、池袋までは行っていない。ということは、池袋の駅を中心にする盛り場は、戦前にはおそらくなかった。池袋は郊外ではあったけれども、戦前から大きな盛り場として栄えた地域であったとは、必ずしもいえないのではないのでしょうか。むしろ、大塚や巣鴨、早稲田などを中心に、戦前の東京の北西部を考えていくことが必要なのかもしれません。

そうすると、池袋の地域はどのように捉えることができるのでしょうか。雑司が谷の墓地、護国寺、鬼子母神といった神社、墓地が、雑司が谷、東池袋の帯にあります。そのまわりには立教大学、学習院大学、日本女子大学、お茶の水女子大学、少し南に行けば早稲田大学もあり、これらの大学が連担してある。つまり駅を中心に考えるのではなく、墓地を大学が取り囲んでいる地域として改めて考えると、池袋、雑司が谷、目白、早稲田、音羽といった地域を一つのつながりを持った地域として見る事ができ

ないでしょうか。そうすることで、戦前あるいはかつてこの地域にあった文化を考えてみるのが可能ではないかと思うのです。

■ヤミ市とは何か

それをふまえて、ヤミ市とは何だったのかという話になっていくわけです。

池袋が戦後、大きな盛り場になっていくときのきっかけが、震災、敗戦、そしてヤミ市であったと思います。池袋のヤミ市は、東口では、森田組のマーケットが有名です。西口に乱立していたマーケットがかなり後まで残ったことは言うまでもありません。池袋のヤミ市は、池袋は鉄道で埼玉とつながっていますから、物資が運びこまれ、マーケットで売られていました。こうしたありようは、占領軍の払い下げ品などが出回っていた新橋や上野とは少し異なる傾向でした。ヤミ市と一口にいても、農村とのつながりで発展していったヤミ市や、旧日本軍や米軍の払い下げ品が流れてきたヤミ市など、多様な性格があったこともふまえておきたいと思います。

そして、ヤミ市の出発点を考えるときに、一九四五年八月十五日の終戦があつて、そこから解放された、ヤミ市が生まれた、と単純にはいえないのではないかと思います。一九四四年頃から旧日本の制度が崩壊しはじめ、敗戦が見えてきている時期に農村部のマーケットがすでに興っていますし、ヤミ市の中でも伝統的な露天商や占領軍との関係などの多面性がある。つまり、戦争が終わり、占領期を経て、戦後になってヤミ市ができた、ということを少し疑ってみました。

日本はいつ戦争に負けたのか。多くの人は「一九四五年八月十五日に決まっているだろう」というでしょう。しかし、たとえば鶴見俊輔さんは、一九六一年に書かれた『日本の百年 第二』（筑摩書房）の中で、「十五年戦争時代とその後にくる占領時代の間に入る一種の空白の時代」あるいは「戦争のかけ声の下に、日本の社会の底には完全な無風状態が存在した」と言っています。

少し解釈を加えると、すでに一九四四年あるいはもつと前の段階で、日本の敗戦ははじまっていたと考えたほうがいいということとです。一九四一年の真珠湾攻撃、一九四二年のミッドウェー海戦、一九四四年のマリアナ沖海戦……。一九四五年になると、三月に東京大空襲、四月以降に沖縄戦、八月には広島・長崎へ原爆が投下されます。ある意味で「もう負ける」のは明らかだった。多くの人たちにも、そうした意識がなかったとはいえないのではないのでしょうか。秩序の解体は、一九四四年末にははじまっていたと、私は思います。それはさまざまな戦地、内地でもそうだったかもしれません。

多くのひとびとは、一九四五年八月十五日までにすでに敗戦を、そのように呼ばないまでも経験していた。八月十五日の天皇の詔書は、そのような多様で矛盾に満ち、本来、言葉にすることすらできないような壮絶な経験を、再び天皇の名の下に回収し、言説化していく狡猾なる仕掛けとなった。

（吉見俊哉編『ひとびとの精神史』第一巻 岩波書店、二〇一五年）

戦前、つまり一九四〇年代半ばまでの日本は、アジアにおける帝国としての日本です。そして一九五〇年代以降——とくに一九五〇年代末〜六〇年代以降の日本は、日米安保条約というアメリカの世界的な支配体制、あるいは冷戦体制の下でその一部に組み込まれながら、アジアの中で中心的な地位を占めていくことになる日本です。これは帝国としての日本からポスト帝國的な体制への移行です。帝国としての日本の時代というのは、日本の帝国とアメリカの帝国がぶつかり合った。しかし、そのアメリカ的な秩序の中に組み込まれていくのが、一九五〇年代末、あるいは一九六〇年代以降だとすると、一九四〇年代はその隙間にあった時代なのではないかと思えます。

一九五〇年代末、あるいは一九六〇年代以降になると、人々は戦後を幸福な時代として経験していくようになる。そうすると、一九四五年に玉音放送によって戦争が終わり、日本は平和な国家になったという物語がくり返されていくこととなります。そして戦後の日本は、一九六四年の東京オリンピック——これは二十四年後のソウルオリンピックや、北京オリンピックに重なりますが——を、この時代のシンボルとして伝説化していく。

そうした中で、ヤミ市を考えると、帝国としての日本と、戦後の日本の中間期、つまり一九四〇年代半ばから一九五〇年代初頭の狭間の時期に、ヤミ市があったということになります。ですから、この狭間の時期に見えていた問題を考えることは、むしろ帝国としての日本の時代からポスト帝国としての日本の時代に移っていく中間の時代に何が見えていたのかを、もう一度考え直すことになるのではないかと考えております。

私からは、東京をどう捉えることができるか、池袋を駅中心ではなく少し違った捉え方もあるのではないか、ヤミ市と戦後を一対一で対応させない見方もあるのではないか、という三点についてお話ししました。後の議論の題材にいただければ幸いです。

闇市の多面性

マイク・モラスキー たいへん濃密な話の後に申し訳ないのですが、軟派で主観的な内容が続くと思います（笑）。生原酒から飲みだして、最後に味の薄い酒が出てくるようなもので、後味が悪いかもかもしれませんが、しばらくご辛抱のほど、お願いいたします。

私にはこの舞台に乗る資格がほとんどないのではないかと、最初から自問しておりました。というのは、池袋について実体験をさほど持っていないといえますか、なじみがない。率直に言って、愛着もあまりありません（会場笑）。

その背景について考えてきたのですが、私の日本での初体験は一九七六年、葛飾区の京成線沿いに住んでいました。当時は成田空港が開港される前ですから、外部から京成線に乗る人は、千葉から農産物を運んでくるおばさんたちを除くと、ほとんど皆無でした。私は、京成線の各駅停車しか止まらない駅に一年間住んでいましたが、その間で欧米人を見かけたのはたった一回。毎日町を歩くと、すれ違う女子高校生などに開いた口がふさがらないまま、指を刺しながら「ガイジン……！」と驚かれたりして、E・Tが町を歩いているような具合で、大変なものでした。

なぜそんな話をするのかというと、当時は一年間の留学で早稲田大学に通っていたのですが、結局早稲田は、池袋というよりも新宿文化圏ですから、学生は新宿に遊びに出かけます。私が友達になった人たちは、みんな中央線沿線に住んでいました。中央線も新宿につながっています。私は京成線に乗って日暮里で乗り換えて、山手線で高田馬場まで行って、早稲田まで歩いて通っていました。つまり、山手線の主要な駅で、いちばん行っていたのは上野と新宿でした。

先ほどの吉見先生のお話にもありましたが、上野と新宿は、非常に対照的ではありますが、どちらもはっきりした性格を持っているという点で、池袋とは異なります。上野は東京藝術大学や東京大学などの文化・芸術的な側面と下町的な側面を両方備えている。新宿の場合は、地理的にみると広大ですが、現在でも新宿三丁目目は新宿三丁目、新宿二丁目目は新宿二丁目、歌舞伎町は歌舞伎町というような、それぞれの町の雰囲気があるわけです。非常に広い領土の中で各区域がはっきりした性格を持っているという点は、新宿をある意味でわかりやすくしているかなと思います。

私は、わざわざ日本に来ているのだから、渋谷や六本木のようなアメリカナイズされた町には近づきたくないと思って、行きませんでした。後になって、渋谷にも、のんびえ横丁などがあるし、地理的に変化に富んでいて、起伏があるという特徴があることがわかりました。ですから、そうした特徴は大きな駅周辺のそれぞれの町にあるんですね。

では、池袋にはどういった特徴があるのか。もちろん猥雑な雰囲気は私も嫌いではありませんが、ちよつと掴みどころがなくて、

いま池袋に対する洞察を提示することはできないと思います。ただ、一九九〇年代半ばに招聘研究員として四ヶ月間、立教大学の宿舎に泊まる機会に恵まれました。そのときは自転車を買って、大の方向音痴なのですが、池袋を昼夜問わず自転車であらうろろしました。ですから、町を見てはいるのですが、今から思えば四ヶ月住んでいたにも関わらず、池袋について何も把握できませんでした。

それで昨夜、シンポジウムであまりにも情けない話にならないように、久々に夜の「調査」に出かけようかと思いましたが、肝臓のトレーニングも最近怠っていますし、美久仁小路など東口のヤミ市が少しだけ残っているところや西口の西一番街に行きました。

最近、私が池袋に来るとしたら、落語をきくためなのですが、いちばん印象に残っているのは、池袋演芸場で地震に遭ったことです。あそこは防空壕みたいに潜っていく造りになっているので、地震があったときは「池袋で死にたくないな」という思いがありました（笑）。

■闇市というストリートカルチャー

それはさておき、闇市——私はあえて漢字で「闇市」と記すようにしています——の話に移りたいと思います。

もちろん、闇市を直接体験したことはありませんが、何も知らない十九歳の留学生だった頃、上野や新宿界限に通う中で、自然に闇市のようなところに惹かれました。どういう点に惹かれて、なぜそこが魅力的に感じられたのかを思い返すと、構造的な側面

でいくつか、私が生まれ育った環境とはまったく対照的なものがあつたからだろうと思います。

闇市由来の居酒屋で飲んでいるときに気づいたのですが、パリのカフェと非常に共通点が多いんですね。パリのカフェの一等席は、店の前の歩道の上のテーブルです。そこに座っていると、店に所属したテーブルではあるけれども、テーブルが置かれているのは歩道という公共空間、すなわち町なんです。これはよく考えると奇妙な話で、本来そこは町の空間ですから、店のテーブルや椅子を出してはいけないという決まりがありそうなものです。しかし、パリの人はそれが都市文化を豊かにする一つの要素だということを理解した上で容認しているのだと思います。

では、日本でそれに匹敵するような場所——飲食するときに、いわゆるお店の中に完全に入っているわけではないけれど、町のど真ん中に座り込んでいるわけではないという飲食店はどこがあるかというところ、それが闇市、あるいは屋台だと思います。闇市もマーケットに発展する前は、ゴザ一枚の屋台からはじまったわけですが、インサイドとアウトサイド、つまり内と外との境界線が非常に曖昧な構造が見受けられます。

たとえば、焼き鳥屋だったら焼き台の前に座って、店の中には壁やドア、窓などの仕切りはありません。閉店したらガラガラと何かを下ろすか屋台のように畳み上げるような形式でした。半分は路地に出張って座っているけれども、半分は店の中にいる。言い換えれば、そこに座っている人の体験として、店内と町の両方の都市空間を同時に味わうことができるという非常に特権的な体験だといえます。

それに気づいたとき、いろいろなことが見えてきました。つまり、店の中が町から切り離されていなくて、非常にローカルな文化が保たれる構造になっているわけです。たとえば、店にいる知人や友人の前を通りかかったとき、その人が外に座っていれば、「おう、どうしてる？」と立ち止まって話しかけてもらうことができます。店の中にいる場合、手は振るかもしれないけれども、さすがに店の中に入ってきて立ち話をするわけにはいきません。内外の境界線が曖昧だということは、町から切り離されていないし、そうした両様の喜びを味わうことができるというわけです。

闇市というのは、一種のストリートカルチャーであると私は捉えています。中近東でもそうですが、アジアの各地の市場に行くとき、ストリートカルチャーはたくさん見受けられます。今日において、日本の都市空間には、ストリートカルチャーはほとんど排除されて、ほとんど残っていません。そうした意味で、懐古主義的なレトロ酒場などは、それを再現しようとしているんだと思います。但し書きは、大衆風の懐かしい飲食店を真似て当時の雰囲気再現しようとしているということなのでしょうが、本質的に求めているのは、おそらくストリートカルチャーなのではないでしょうか。

つまり人間の規模に見合った生き生きした町です。路地とは人間の規模に見合っただけで、車や自転車が通れない、人間が歩くための、いわば二十四時間、歩行者天国です。再開発によって、きれいで広い公共空間がたくさんつくられて、確かに喜ばしい側面もあります。しかし、その一方で失われているものとして、こうした人間くさい、まわりの人との身近な交流がある、店の中と店の外、

店の人と町の人が完全に切り離されていない日常を味わうことができる場所があるのではないかと思っています。それが私の居酒屋研究のときに、闇市に対して気づいたことです。

■闇市と文学

私は日本文学の研究者として出発しましたが、最近では居酒屋ですとか、いろいろなことに手をのばして、日本文学とは関係ないような研究にしばらく携わっていました。最近ちよつと文学回帰しようと思っていたところ、長年縁がある皓星社という小さな出版社から「新しい文学作品集のシリーズを立ち上げるので、そのうちの一、二冊を担当してほしい」という依頼をいただき、一冊目は闇市にしようと思えました。つまり、闇市が登場する短編小説、主に終戦直後に刊行されたものですが、専門家にもあまり知られていないような作品群をまとめて、それを通して、闇市についてどんな新たな側面が浮上してくるのかを考えてみようという試みでした。その結果、私にとっても意外な側面が多く浮上してきて刺激を受けたので、それをきちんと整理したいと思い、解説を書きました。

いわゆる闇市に対する実態調査あるいは実証的研究は、吉見先生もおっしゃったように非常に優れた研究がたくさん出ています。私は専門外ではありますが、闇市に対してさらにどういった貢献ができるのか。そこで、文学作品すなわち〈虚構の物語〉を通して新たな実態を見いだすことができるかもしれない、ということ

を出発点として、冒頭で紹介いただいた『シリーズ紙礫1 闇市』をまとめました。

この中に収められている作品は、あまり知られていない作家のものも多少含んでいます。どちらかというと〈名の知れた作家のあまり読まれていない作品〉を中心に編んであります。そこで、私の目についた闇市の三つの側面について簡潔に申し上げますが、吉見先生のお話をうかがって、同じ地域について同じようなことを別の角度から考えているのだということに気づきました。

一つは〈流通〉ということです。たとえば、百円札を語り手とする太宰治の「貨幣」という作品がありますが、その書き出しは「私は、七七八五一号の百円紙幣です。あなたの財布の中の百円紙幣をちよつと調べてみて下さいまし。あるいは私はその中に、はいっているかも知れません」とはじまっています。非常に奇抜な構想の物語ですが、この百円札が、どんどん流通していくんですね。それから、この話は〈場所〉としての闇市ではなく〈闇屋〉の話です。〈闇屋〉の話はこれ以外にもたくさん出てきます。たとえば、坂口安吾の「日月様」とか織田作之助の「訪問客」です。〈闇屋〉というのは、必ずしも闇市という〈場所〉を指すわけではなく、〈流通〉していくわけです。

闇市の根源的な原理というのは〈流通〉にあるのではないでしょう。闇市を〈場所〉としてだけ捉えていくと、闇市のもう一つの側面を見失ってしまう可能性があるのだということを、この作品群から教えてもらいました。

「市場」と「市場」は、同じ漢字ですが、そこには二つの側面があって、「闇市」——「市場」は固定した場所を指し、「市場」はヤミ経済のことを示します。ようするに、終戦直後だけではなく、戦争中、および戦争末期には、こうしたヤミ経済に必然的に

頼っていたという事実もあるわけですが、それが見逃されている面があるのではないかと思ひ、作品を読み返したところ、一つの特徴として、経済流通システム——「市場」と「市場」の両面性を備えているのが闇市であるということに着目すべきだと気づいたのです。それによって、戦中と戦後の境界線も曖昧になってきて、ある意味では無理に明確な歴史的境界線を引く必要がなくなるのではないかと思ひます。

二つめは、有名な話ですが、野坂昭如が直木賞を受賞した際、自らを「焼跡闇市派」としたことについてです。それも掘り下げて考えてみると、「焼跡」は空襲の跡ですから、戦争を意味している、「闇市」は野坂にとつては基本的に戦後のことです。しかし野坂は「焼跡」と「闇市」の間を中点やコンマ、スラッシュのような区切りの表記を一切使わずに「焼跡闇市」と続けています。つまり、戦争・敗戦・戦後というのは、彼の中では一つの連続した流れになっているわけです。ですから、闇市も占領も戦争の産物であるということを、作品を通して間接的ながら主張している、ということが読み取れるのではないかと思ひます。

最後に、これは私の表現ではなく、猪野健治さんが編集された『東京闇市興亡史』（草風社、一九八五年）の中で「解放区としての闇市」ということが書かれています。この点については、しばしば指摘されており、普通、戦時中に弾圧されていた人たち——被差別部落の人、当時三国人と呼ばれていた在日韓国人、台湾人といたった人々が、突然解放されて闇市で活躍していくという捉え方がされています。

しかし、中里恒子の「蝶々」という作品などを読むと、別の側面もみえてきます。戦前の階級制度も崩壊してしまうので、履歴書が意味を持たない時代が一时的にはじまるわけです。就職しようとする、普通は履歴書の提出を求められますし、職務履歴も問われます。実証研究でも指摘されていることですが、こうした履歴や経歴がまったく問われなくなるのが闇市の時代です。闇市の店を営んでいた人々の多くは完全に素人でした。そうした人たちが何の経験もなく商売をはじめめるわけです。

「解放区」というのは、多面的に捉えてしまえば、ただ戦前の体制が崩壊した関係で軍国主義から解放されただけではなく、男女における支配関係から解放されたように感じる女性作家の作品もあります。それから、説明が難しいのですが、長年自分に対して抱いていた錯覚や幻想から、敗戦という大きな衝撃によって開眼させられて、自縄自縛という側面から解放された体験を描いている作品も何編もあります。これが非常に興味深い。曖昧で主観的な話なので、実証研究ではなかなか取り上げにくいのですが、闇市にはそうした側面もあったのではないかと思ひます。

戦争、戦後における闇市の意義とは何だったのか。それを考えるときに、さまざまな資料、インタビュー、日記、実証研究や実態調査だけではなく、いわゆる〈虚構の物語〉が新たな光を当ててくれる側面もあるのではないかと改めて考えさせられました。

池袋文化再考

川本三郎 モラスキーさんが冒頭でお酒のたとえをされましたが、今回のプロジェクトの協賛企業のトップにホッピービバレッジ株式会社があるので、ちよつと感動しました。ホッピーという会社は、いかにも池袋に合っているなと思います。

ホッピーは、つい二十年くらい前は東京の下町の居酒屋でしか取り扱われていませんでした。ビールが高くて飲めない人たちが、値段が安くちよつとビールの味がするということで、ホッピーを飲むようになっていきました。

近年、社長が女性に代わって、おしゃれ度が増してきて、健康にもいいということで、急速に普及が進みました。かつてはホッピーを置いていなかったような山の手の居酒屋でもホッピーが飲めるようになりました。しかも、ホッピーの本社がどこにあるかご存じでしょうか。場末にありそうなものですが、実は赤坂にあります。

ホッピーという会社がこのプロジェクト、このシンポジウムを後援してくれていることは、池袋の変化、つまり、かつてはダメだった池袋がしだいにおしゃれになっていくということを象徴しているのではないかと思います。

吉見さんのお話は、主として東京オリンピック以降の東京池袋についてだったので、私は少し遡って大正から戦後にかけての池袋についてお話しいたします。

■永井荷風と池袋

池袋駅は、現在でも非常に乗降者数が多くて、東京の中でも主要駅になっていますが、実は池袋駅の開設は、板橋、赤羽の駅よりも遅かった。赤羽駅は、一八八五年に開設されますが、池袋駅は、それから二十年後の一九〇三年に開設されました。当初、明治の鉄道は、東京では品川と赤羽間があり、さらに赤羽を分岐点として上野と結ばれていました。当時、目白駅はすでにできていましたが、池袋駅はまだありませんでした。品川と赤羽、赤羽と上野が結ばれていましたが、三角形として考えた場合、底辺がないような感じでした。それが非常に不便だということで、田端から池袋にかけて、今の山手線をつくろうということになって、そのために池袋の駅が開設されたわけです。明治末期、一九〇三年のことでした。

その頃から徐々に町らしくなっていくわけですから、東京の中ではかなり若い町であるといえます。したがって、池袋について書かれた文学作品は、実はあまりありません。かろうじて挙げられるのは、島崎藤村が教鞭を執っていたことで知られている、当時池袋にあった明治女学校に通っていた野上弥生子が女学校時代のことを思い出して書いた「森」という作品が浮かぶくらいで、池袋を舞台にした小説は、明治・大正期にはあまりありません。今日は文学者の書いた池袋についての作品を二つ持ってきましたので、それらを紹介しながら、池袋の町がどのような歴史をたどってきたのかをお話しします。

最初は永井荷風です。永井荷風の有名な日記『断腸亭日乗』の一九二六年一月一日にこういう記述があります。

昼舖の後、靈南坂下より自働車を買ひ、雑司ヶ谷墓地に往きて先考の墓を排す。墓前の蠟梅今年は去年に較べて多く花をつけたり。帰路歩みて池袋の駅に抵る。沿道商塵旅館酒肆櫛比するさま市内の町に異ならず。王子電車の線路延長して鬼子母神の祠後に及べりと云ふ。池袋より電車に乗り、渋谷に出て、家に帰る。

永井荷風の自宅は港区にありましたが、昼食を食べたあと、自宅から自動車を雇って雑司が谷の墓地に行き、まず父親のお墓参りをする。その後、池袋の駅に至ります。荷風が池袋の駅に降り立ったのは、この時がはじめてです。つまり、最初の大きな目的は雑司が谷墓地であつて、池袋はその付録だったわけです。吉見さんのお話の中で、雑司が谷墓地をこの地域の大きな特色として挙げられていましたが、墓地というのは、大体都心にはつくられません。東京の墓地の歴史を振り返ってみると、最初は浅草の周辺につくられます。ところが明治維新後、人口がどんどん増えてくるので、郊外へ、郊外へと墓地が広がっていきます。たとえば青山墓地です。青山というのは、現在は都心ですが、青山墓地がつくれた当時は郊外でした。そこが満杯になると、今度は谷中につくられ、それから雑司が谷につくられます。これも満杯になった結果、多摩墓地や小平霊園ができたわけです。このように、墓地はすべて郊外につくられていました。雑司が谷に墓地があったということは、このあたりが昔は郊外であったということの表れでもあります。

それから「沿道商塵旅館酒肆櫛比するさま市内の町に異ならず」と言っています。荷風は港区という都心に住んでいる人なので、そこから見ると当時の池袋は場末です。さびれたところだとかかり思っていたら、思いがけず商店街が「市内の町に異ならず」できていたと驚いているわけです。これはどういうことを意味しているのか。

一九二六年ですから、関東大震災の直後であるということにすぐ思い至ります。一九二三年の関東大震災によって東京の中心地が壊滅し、その人口が西に流れていきます。現在の中央線や東横線などの私鉄の沿線はすべてそうですけれども、人口が移動しているということがわかる。先ほどお話ししましたように、一九〇三年に開設した池袋駅は、関東大震災の後の人口移動によって、一九二六年の永井荷風が歩いたときには市内の街にひけをとらないような賑わいを見せていたことがわかります。

荷風はそのあと池袋から電車に乗って渋谷に出て、家に帰る。王子電車（現・都営荒川線）が雑司が谷まで延びています。つまり、それだけ池袋が賑やかになっていたので、接近している。現在の池袋の原形は、関東大震災後の東京の人口の西への移動によってつくられたことがここから窺えます。そして、ますます人口が増え、一九三二年には、豊島区という区が成立するわけです。

■種村季弘が見た池袋①

二番目に紹介したいのは、私の最も尊敬する文学者の一人である、ドイツ文学者の種村季弘さんのエッセイです。種村さんは池袋二丁目のお生まれです。ここは池袋の中でもかなり猥雑なところ

ろで、昔の三業地ですね。種村さんは一九三三年生まれですが、こんな文章を書いています。

最近の池袋はアジア人のたまり場なのだそうだ。池袋はしかし私の子供時代からずっとそんな町だった気がする。向こう三軒両隣は、北海道や沖縄からきた人だし、同級生には大泉学園の撮影所に転職してきた関西芸能人の子がいっぱいいた。震災後、下町から引越してきた絵描き、新聞記者がいた。音羽が近いので講談社文化人も多い。(略)家の裏手が芸者街だった。昼間から三味線の音が甘玉のように滴り落ちてきた。

短い文章の中に、池袋の特色が盛り込まれています。たとえば、一九三三年生まれの種村さんですから、一九四〇年のことでしようが、向こう三軒両隣り、北海道や沖縄からきた人がいたというところに、池袋の特色が表れています。池袋の居酒屋といえば、お酒の好きな人はすぐに思い浮かびますが、現在も健在の「おもしろ」という沖縄料理の居酒屋ですね。沖縄料理の居酒屋です。池袋に沖縄料理の居酒屋が長いあいだ健在であったということは、池袋が震災後に開けた新しい町であったために、よそ者を受け入れやすい町であったことがわかります。

ずいぶん前に亡くなりましたが、山之口獏という池袋を愛した詩人がいます。この人は西武線沿線に住んでいらして、しょっちゅう池袋に来てお酒を飲んでいました。山之口獏は沖縄の出身ですが、彼がいちばん愛した居酒屋が「おもしろ」です。こうしたとこ

ろに池袋のよそ者を受け入れやすい土地柄——それが現在の池袋駅の西側の中国料理屋や韓国料理屋が並ぶアジアンエリアがありますが、あそこに結びついている。ちなみに、立教大学の誇るべきことの一つとして、関東大震災が起きて東京のあちこちで朝鮮人が虐殺された際、立教大学は朝鮮人の留学生を学内で守ったという歴史があります。

種村さんの文章に戻りますと、震災後、下町から引越してきた絵描きや新聞記者がいたという記述からも、関東大震災後に開けていった町だということを表しています。もう一つおもしろいのは、「同級生には大泉学園の撮影所に転職してきた関西芸能人の子がいっぱいいた」というところです。西武池袋線の大泉学園に東映の撮影所(東映株式会社東京撮影所)がありますね。これの前身である新興キネマという撮影所がありました。当時の撮影所は、広い敷地を必要としたので、郊外につくられました。その映画関係者が池袋に多かったということを語っているわけです。これも見落とせない池袋の特色ではないでしょうか。現在も東映の撮影所がありますから、私の知っている映画人でも、かなり多くの人

が池袋に住んでいます。

「音羽が近いので、講談社文化人も多い」というのも大事なところ。日本の大出版者の一つである講談社は護国寺にあります。ここは池袋文化圏ですね。したがって、編集者、作家がこのあたりに多くいたわけ。漫画家が多かったということも、トキワ荘に手塚治虫が住み、若手漫画家が住んでいくということも、講談社が近かったということが大きな要因ではないかと思えます。池袋というと、なんとなく「昭和三十年代までは文化と呼べるも

のではない」みたいなことがいわれますが、そんなことはありません。講談社文化圏の一端であったことがこの記述からわかるわけですね。

「家の裏手は芸者街だった」とありますが、池袋には花街がありました。今もその名残があつて、たしか池袋の二丁目に「三業通り」という通りがあります。「さんぎょう」というのは industry の「産業」ではなく、三業地の「三業」です。吉見さんのお話の中に、戦前は大塚のほうが賑やかだったというお話がありました。そのとおりで、大塚にあつた料亭の子供だった詩人の田村隆一さんのエッセイに、戦前は池袋よりも大塚のほうが賑やかだったということが書かれています。池袋出身の種村季弘さんと大塚出身の田村隆一さんが会うと、いつも田村さんが種村さんのことを「俺のところは三業地だったけど、お前のところは二業地だろう」と言つて差をつけたそうです。二業地は三業地より格下だという意味ですね。二業地はその後、三業地になつたのですが、そうした歴史というものにも目を向ける必要があると思います。

■種村季弘が見た池袋②

種村さんの文章でもう一つおもしろいものがあります。種村さんは終戦後に高校時代を迎えますが、その都立北園高校時代についても文章を書いています。これは池袋のヤミ市の活気とも重要なところがあるので、少しご紹介します。

私たちの高校は、当時野坊主といつていいほどリベラルであつた。授業中でも三分の一ほどの生徒が後方に固まって焼

酎を回し飲みしている。昼休みになると先生と生徒が中華そば屋でカストリを飲み歩かう。ついには池袋東口のダンスホールで先生と生徒が遭遇する。両者ともに慌てず騒がず、むしろいい機会とばかりそこがたちまち教室になる。

(種村季弘『書物漫遊記』ちくま文庫、一九八六年)

今の管理社会の大学からは考えられないような、なんともアナーキーな雰囲気醸し出されていて、非常に羨ましくなります。もつとも種村季弘さんは、偽物やまがい物が大好きだった人なので、話半分に聞かないといけないところがあつて、どこまでが本当かわかりませんが(笑)。こうした自由な雰囲気から、ヤミ市の自由といったものが学校関係者にも浸透していったことがうかがえます。

こうした授業をしながらも、種村季弘さんは私が尊敬してやまない大知識人で、一体いつ勉強していたのだらうと思うのですが、種村さんの勉強のひとつが映画館だつたという話があります。池袋の戦後の映画館のはしりは、東口にあつた人世坐で、一九四八年に開館しています。これはいかにも池袋的なのですが、ロードショー館ではなく、いわゆる名画座ですね。ロードショーで公開してから、時間が経つてフィルム代が安くなつたのを二本立てで公開する映画館でした。

山窩小説で知られる三角寛という人が戦後、人世坐を開館し、一九六八年に閉館、文芸坐に引き継がれました。これが現在の新文芸坐につながっています。私はかろうじて人世坐を知っている世代ですが、最後の上映はゲイリー・クーパーとイングリッド・

バーグマン出演の『誰がために鐘は鳴る』とキャロル・リード監督の『第三の男』の二本立てで、超満員の中で観た記憶があります。

人世坐は非常に不思議な映画館でした。三角寛はいろいろなことに興味を持った人で、漬物を自分で漬けて、あろうことかそれを映画館の売店で売っていました。漬物を販売している映画館は、おそらく日本であそこだけだった（笑）。これもいかにも池袋的ではないかなと思います。モラスキーさんが「ヤミ市のいいところは関係性がなくなるところだ」とおっしゃっていましたが、池袋はまさに既成のルールというものからはみ出したところでおもしろさが生まれていったのだと思います。

※以上は、当日開催されたシンポジウムの前半部分を採録したものです。後半の、パネラー同士の意見交換や質疑応答を含む全体については、ひつじ書房より出版される書籍（二〇一六年中に刊行予定）に収録される予定です。（「池袋学」事務局）